挽歌

(1)

山口英

その人はすわっていた
くろっぽいゆかたを着てすわっていた
となりのへやでは三人のこどもが
おなじようなくろっぽいゆかたを着てすわっていた

その人はまもなく死ぬ
いや、死んだことをほくは知っている
だからほくはことばにならぬことばで話しかける

それがこちらがわからよく見えている

夜のようにくらく
蝉がしきりにないている

(一九六七)

挽歌

(2)

二月の真夜中
ふとめがさめて
ねがえりをうつと
叔父のねどこはもぬけのからだだった
うつらうつらしながら待っていたが
もどってこなかった

北風がびゅうびゅううなっていた
しだいにむねがどきどきして
便所へいそいだ

いなかった
うらの納屋へまわってみたら
便所の窓のあかりのなかで
叔父が立っていた

なにしてなさんと手をかけたら
ぐらっとうごいた

まだすこしぬくみがあったと
叔母は手を見つめていた

わからん
なんで死んだんか
とんとわからん
と眼をふせた

たぶん

じぶんでじぶんがいやになったんでしょ

そういうときがある

男にはある

としとった家長にはある

ひとの世がいやになったのではない
生きているのがくるしいのでもない

いつもだれかにうごかされていたにんげんは
さいごにじぶんでうごかしたくなる

じぶんのゆびで
じぶんじしんを
あっちの方へ

(一九七〇)

挽歌

(3)

往きの列車のなかで
ずっと昔の仲間に出逢った

男は

その後のこと

仕事のこと

家のことなど

一気にしゃべった

むすこが在学中なのに

停年がせまっていて

授業料の値上げはつらい

ゲバ棒をふるいたたいくらいだと笑った

小さな駅の改札口から

男のややまがった背中が消えると

ぼくの二十年もあんなに手短かにしか話せないだろうと思った

帰りの列車のなかで

きょうみてきた二つの古墳のことをしきりに思いうかべた

二つとも玄室にはなにもなかった

きれいさっぱりなにもなかった

けさ男が出ていった改札口には

ぼつんと灯がついていた

(一九七一)

書評

小松隆二著《日本アナキズム運動史》

戸田 広 介

表題の新書を読み、書評を書こうとしていたところで師走総選挙とやらの結果が判明した。すべての新聞が共産党の躍進を大見出しで報じている。これがはたしてへ革新陣営の強化につながるものか、私はそうではないと思う。共産党三十八議席獲得の理由は、次の二つである。第一に、大衆が自民党の政権独占下における野党勢力、杜・公・民の無力ぶり、そのことによってブルジョアジーから保証されている地位の長期固定化に倦み、別のへ革新を望みはじめたこと。第二にはそれと関連して、一にも議會、二にも議會という日共の路線が徐々に浸透して、日共が議會主義政党であることを大衆が承認しはじめたことである。総選挙の勝利に自信を得て、日共官本体制は今後ますます自己の議會主義路線を純化していくであろう。もともと、共産党が躍進したといっても、それは保守独裁政党日自民党の地盤を掘りくずして手にいれたものではなく、中間野党を食いつぶしたにすぎない。これは革新の進出などといえない。自民党は

安泰である。日共はブルジョア議會へのめりこんでいき、人民の諸闘争への敵対を強めるであろう。私たちはブルジョア議會をのりこえ、人民議會人民國家をものりこえ、その彼方に人民自身による世界の掌握を肉化するための構想を深化しなければならない。

(1)

さて、戦前日本のほぼ全時期を視野におさめたアナキズム通史としては、さきに近藤憲二著《私の見た日本アナキズム運動史》がある。これに最近出版された本書を加えて、明治以来の日本アナキズム運動を現在の時点から概括的に鳥瞰する便宜をさらに得たことになる。もちろん、本書は通史であって、個々の時代・事象への集中的な関心を満足させるものではない。それはまた別の文献群による必要がある。私たちはある時は対象から遠く離れて関係の全体をながめ、またある時は徹視の領域まで接近してわが手で対象を腑分けする。本書は日本アナ

キズム運動の出発から現在までを巨視的に通観することに役立つのである。

私なりの読後感をひと言でいえば、なにかサラリとした、無色無臭といった感じである。アナキストの手になる通史・研究・回想を読みなれた目からみると、あそこんな見方や書き方もあったのかと小さな驚きすらおぼえた。文学の分野は別に、私はよく知らないが非アナキストが研究の目的でアナキズム(運動)をとりあげたものは大逆事件をのぞいてごく少ないのではないか。私たちが今読むことの可能な文献は大部分がアナキストの手になるもので、そこには筆者の思想への情熱や情念、あるいは主観が色濃くにじみだし、独得の嗅みをもっているのである。それがまた魅力であった。小松隆二著の本書はそれらとはちがひ、資料・調査によって立証し得たことがらをつとめて客観的に記述している。私は本書を読みすすみ、運動史の知識を教科書的に得る反面、物足りなさをおぼえるのだ。ほとんど唯一の客観的通史であることに本書の意義があり、もしこれと似た本があとちこちから出はじめたら私は食傷して通読するのをつらく感じるのだらう、運動史の正確な知識を得たいという希望とは別に。

社会変革論や自由連合論だけでは、労働者を十分にひきつけることはできなくなった。そこにいたり、アナキズムの理論体系の脆弱性、とりわけ労働組合論の不備がいやおうなく露呈されることになった。(P一七九)とこれはまづ正当な批判である。

そして大正末期、大衆運動からの後退の間隙にテロリズムがあらわれる。一連のテロリストの行為をへアナキズム運動の軌道を逸脱したもの、とみる著者は、古田・中浜をはじめとする黒いテロリスト群の発生を、へ一つには自己の弱さを自覚して最もきびしいテロルを課すことで、自らをそれ以上後退できない立場に追いこむせっぱつまった心境によつていた。もう一つには、変革への戦略・戦術の欠如と安易な楽観論によつていた。(P一八二)模範的な解答ではあるが、もうひとつ納得できない。これは一般にいえることだが、大正末期の黒いテロリストの個々の事象はよく調べられ資料もほぼ出そろっているが、その思想的核の解明については、まだ手のつけられぬまま残されているのではないか。少なくとも先に引用した二つの要素だけでは不十分で、大正という時代の時代的背景・精神をも加えつつ、彼らの暴力の核心に迫らなければならぬ。

昭和期に入ってからのアナキズム運動は、大衆運動か

(2)

日本アナキズムの運動としての開始は一九〇七(明治四〇)年前後からであるが、今日までのその間、いくつかの結節点に転回点を運動史の内部に持っていた。本書により大雑把にみていくと、まず、直接行動論(幸徳秋水)としての明治アナキズムから、大正初期、大杉栄によつて原理的に、また目標としても個々反権力の視点が明確にうちたてられた時期を経て、へ労働者の時代へへと転進していく。著者はかなり詳しく印刷工を中心とする労働運動のはじまりから、友愛会・総同盟系と勢力を二分するまでに至り、いわゆるアナ・ボル対立を頂点として状況の変化の中で次第に衰微していくまでを跡づけている。へ労働運動は労働者の自己獲得運動、自立自治的生活獲得運動である。人間運動である。人格運動である。というのは大杉の有名な、美しいことばであるが、へ(大杉の理論は)資本主義の発展法則の解明とその理論化については十分掘り下げていないことがすぐに指摘されるが、労働運動論でも、経済闘争を明確に位置づけ、それとの連鎖において人間運動を具体化するところまで深められていなかった。(本書P一一一)それがのちの分散と後退のひとつの遠因となる。へかくして少数運動から大衆運動へ転化する大震災後にいたると、抽象的な

らの後退のつづく中で、良くも悪くも多彩である。その各々は戦中と戦後をくりぬけ、現在に痕跡を印している。黒色青年連盟の結成から開始されるこの時期、いわゆる純正アナキズムの浸透によつて内部に大きな亀裂がおこり、それは労働運動に持ちこまれて全国自連の分裂となる。へ資本主義社会にある現実から出発して「純正に」アナキズムの理念にのつとつて生き、行動していくこととする飛躍が生まれてきた。そこでは変革へのプロセスである現実においても理想社会を表現するアナキズムに反するもの、不純なものはいっさい拒絶していこうとする方向が描かれていた。(P二〇六)ところの純正アナキズムの問題も、大正末期のテロリズムとならんで、十分に分析、評価されないまま運動史の暗がりに放棄されて、時々否定的な一瞥を投げられるにすぎないように思われる。本書にもあるように、純正アナキズムの労働運動の分野における誤りはたしかに決定的であるが、しかしこの時期、労働運動とは別の分野の運動、解放文化連盟や農村青年運動、無政府共産党等の運動推進者が、どちらかという純正アナキズムの思想脈、あるいは人的脈から出てきたことの中に、へ純正アナキズムのエネルギーを私は仄かに見るのである。私の粗いとらえ方では、アナルコ・サンジカリズム系がともすると大衆運

動へ傾斜する傾向をもっていたのに対して、純正アナキズムの一部（あえて一部という）は革命者であるアナキスト主体の問題を問い、そこからアナキスト独自の革命運動を構想したのである。

一九三五年十一月から翌年にかけて、無政府共産党の検挙にはじまり、農青検挙、自連解散と追いうちをかけるようにアナキズム運動はここに終熄した。

戦後、アナキスト組織は再建されるが、大衆運動をになう力量をふたたび持たない。その一方で戦前の対立をひきずるように陣営の内部に分裂と混迷が存在する。本書の終章から二、三引用して、この一文を締めくくることとしよう。

へアナキストは人間Ⅱ個の尊厳、自主自治の精神、あるいは自由連合主義を高唱した。個の自立・人間性の回復という命題にたいし、彼らほど情熱を燃やしたものはほかにいなかったといっても過言ではない。（略）しかしその反面で理論的にはたえず不十分さと未完成な側面、経済分析や経済理論の不備、また人間Ⅱ個の尊重や自立といったながら、その意味すること、あるいはそれが現実の運動においてどのように生かされるかということなど、多くの点でも不鮮明な部分が少なくなかった。（P二四

六）

へ資本主義の高度化がすすむなかで、アナキズムが体制内において権力や権威の骨抜きをはかる個人主義的な個の自立の思想としての道をえらぶのか、それともそれをこえて強力な反体制理論としての道をえらぶのか、あるいはその双方を結びつけた反逆と反体制の理論としてすすむのか、といった戦後アナキズムの中心的な流れを構成したいいくつかの視点も未解決の問題としてのこされたままである。（P二五〇）

へその思想・運動に有利な状況が訪れているといわれながら、その再昂揚がみられないということは、外的条件をうんぬんするより、その内在的脆弱性を問われなければならぬと考えるべきだろう。（P二五一）

私たちはこの提言を素直にうけとるべきであろう。私たちは問われているのである。

（青木書店刊・三五〇円）

へ大逆事件へ東上記

——一月二十四日と二十五日——

向井孝

一月廿一日に上京した。用件のひとつはへ大逆事件の真実をあきらかにする会へが例年の行事としてしているへ一月廿四日の集りへに出ることだった。

いうまでもなく、それは第一に、明治四四年一月廿四日に幸徳ら十一名の人たちが、翌廿五日菅野スガが、絞首台にのぼっていったことで、決して忘れられない日である。

第二に、明治四五年以降、いわゆる冬の時代のきびしい弾圧をくぐって、堺利彦ら少数の仲間が、毎年その日ひそかに集ってきて墓参し、遺志をつくことを誓いあつたへその無量のおもいをこめた行事のへ志へと伝統を継承するものとしてである。

ところが、通知が一向にこなかった。

上京して森長氏に電話したら、「ことしは集りを中止し、その対策の世話人会をやるだけ」というのであった。菅野スガの碑がある淀橋の正春寺でひらかれた世話人会は、森長英三郎、糸屋寿雄、神崎清、塩田庄兵衛、大

原慧、大野みち代、遠藤斌の諸氏七名とおわりちかく平岡誠氏が顔をみせた。

へあきらかにする会への世話人が、弁護士や学者や文章かきといったへそれにもまして現実のアナキズム運動と会がほとんど無縁に見えることが、ある種のアナキストにとって気に入らないらしいことは、およそ想像でき

る。だが、この会の発足当初から、またはその企てに対して、一・二をのぞいてアナキストたちは、何の協力もしなかった、といってよいだろう。もっともアナキスト自体が非力だったし、それぞれ事情もあったことだろう。それは情ないことだが仕方がないことである。

会の活動は、だからむしろアナキスト以外の人々の協力と貢献によって、有志による大衆運動として、果されてきた。いままなおそうであり、それはかわっていない。とするならば、非力あるいは他の事情でかわりえなかったアナキスト自身をかえりみると、アナキストは